

2026年度 森づくり年間計画

洲崎国有林地・村民の森／TWR森づくり × 小笠原村立小笠原小学校 4年生 総合学習

テーマ：固有種を守り・増やしながら、外来種とどう向き合うか

本計画は、**2025年度 小笠原小学校 4年生**が総合学習「森をつくろう！」で立案した方針・アイデアを、TWR事務局が昨年度の年間計画フォーマットに沿って取りまとめたものです。児童の発表ポスター「植物と〇〇」および次学期の調査に向けたワークシートを一次資料としています。現地調査を経て確定する項目（数値目標・月別スケジュール）は「今後策定」として区別しています。

はじめに

洲崎村民の森では、【**洲崎国有林地森林整備マスタープラン**】に則った森林整備を行っています。特に管理範囲北部は、約300㎡ずつに区画を分割し、「より効果的な自然再生手法の試験地」や「ESD（持続可能な開発のための教育）の場」としても活用しています。

TWR森づくりは、このマスタープランをベースに、小笠原村立小笠原小学校4年生の総合学習プログラムと連動する形で年間計画を策定しています。総合学習プログラムでは、1学期の「小笠原の植物博士になろう！」で小笠原の生態系、外来種がもたらす課題について学びます。2学期までに各自が興味を持った植物の特徴を調査・発表し、2～3学期で「森をつくろう！」をテーマに、これまでの学びをふまえて森林再生の基礎知識や課題、目指すべき方向性から、翌年度の年間作業計画（300㎡）を策定します。

本計画の内容は、2025年度の4年生が上記の学びの集大成として作成した方針・アイデアに基づいています。



森づくり活動に参加する子どもたち・スタッフ

2026年度エリアの方針（児童立案）

今年度の4年生が立案した方針の中心にあるのは、次の考え方です。

「優先順位は固有種。だけど、外来種ともできれば共存できるとよい。」

この一文には、固有種を守り増やすことを最優先としつつ、外来種を一律に「悪」として扱うのではなく、できるかぎり傷つけずに向き合いたい、という児童の姿勢が表れています。ワークシートに書き出された意見を方向性ごとに整理すると、以下の4つに束ねられます。

① 固有種を守り、増やしたい（いちばんの軸）

- 固有種を守りたい・増やしたい。
- 固有種が外来種に殺されないようにしたい。
- 外来種を枯らさずに、固有種を増やしたい。

② 外来種もできるだけ傷つけない（共存への迷い）

- 固有種を守りつつ、外来種も傷つけないようにしたい。
- ほかの植物を殺さず、外来種と固有種を離したい。
- 外来種は殺すしかない？ → でも最小限にしたい。

ポイント：「守る＝排除する」と単純化せず、"命をなるべく奪わずに分ける方法はないか"という問いに、複数の児童が自分からたどり着いています。

③ 固有種と外来種を「分ける・境界をはっきりさせる」

- 固有種と外来種を切り離したい。
- 固有種と外来種の境界線をはっきりとさせる。

現場との対応：森づくりエリア図では自生林側と外来種の森側を分ける明確な植生境界があり、道・斜面・草地といった地形を境界として活かします。児童の"分けたい"という発想と現場の区分が一致しています。

④ 世界遺産の島としての誇り

- 世界遺産であり続けたい（＝小笠原らしい自然を残したい）。

方針の土台となった学び（発表ポスター「植物と〇〇」より）

森づくりの前提として、児童は「植物は人間・虫・動物すべてを支えている」という生態系のつながりを、島の具体的な生きものを例に理解しています。この"つながりの視点"が、外来種問題を「一種だけの問題」ではなく「森全体の問題」として捉える土台になっています。

植物と動物 — 外来種をめぐる葛藤

- 動物は、植物を食べる／植物を使って家（巣）を作る／植物を使って敵から身を守る。
- オガサワラオオコウモリは外来種の実を"大好き"で食べる。→ **「もし外来種を切ってしまったら、食べ物が減っちゃう？」**という葛藤に、児童自身が気づいている。

重要な論点：外来種＝ただ悪、と切り捨てられない。コウモリなど在来動物が外来種を餌にしている現実を児童自身が見つけており、森づくりで外来種を扱う際に必ず立ち返るべき視点です。この気づきは、後述の「オガサワラオオコウモリの餌となる樹種を植える」方針に直結しています。

植物と虫 — 固有種ルリカメムシの例

- ルリカメムシは小笠原にしかない固有種で、ハウチワノキ（小笠原の固有植物）に住んでいる。
- **「もしハウチワノキがなくなったら…ルリカメムシもいなくなる?!」「居場所がないよ～」** → 特定の木を守ることが、その木に依存する虫を守ることに直結すると理解している。

植物と人間

— 木は燃料になる（戦争のときにも使われていた、という調べ学習）。植物は人が"かくれられる"場所にもなる。

— 人も植物を利用してきた、という人と植物の関わりへの気づき。

これらの学びから、児童は次の結論を自分たちの言葉で導いています。

「動物は、植物に支えられている。」

= 森（植物）を守ることは、そこに暮らす動物・虫すべてを守ることだ、という森づくりの動機づけです。

児童から出た具体的なアイデア

方針を実現するための具体案として、児童からは以下が挙がっています。作業計画（本数・場所）は現地調査後に確定しますが、方向性はこの段階で定まっています。

- **固有種と外来種を「分ける」森づくり。**道・斜面・草地の地形を境界として活かし、固有種の生育場所をはっきりさせる。
- **外来種の駆除は「最小限」に。**枯らす・殺すことを目的化せず、固有種を増やすために必要な範囲にとどめる。
- **オガサワラオオコウモリへの配慮。**コウモリの餌となる樹種（モモタマナ・タコノキ等）を中心に植える。外来種を減らすと餌が減るという葛藤への、児童なりの答え。
- **ルリカメムシなど固有の生きものの「居場所」を守る。**依存する木（ハウチワノキ等）を残す・増やす視点を持つ。
- **バイオネストを活用したヤギ対策。**植えた苗がヤギに食べられないよう、駆除した木の枝を組んでバイオネスト（枝の囲い・壁）で苗の周りを守る。長く連ねる「万里の長城」づくりで、ヤギの侵入そのものを防ぐ。児童が自分たちで考えたヤギ対策で、苗の食害という課題への答え。



コウモリの餌となるモモタマナ（葉のようす）



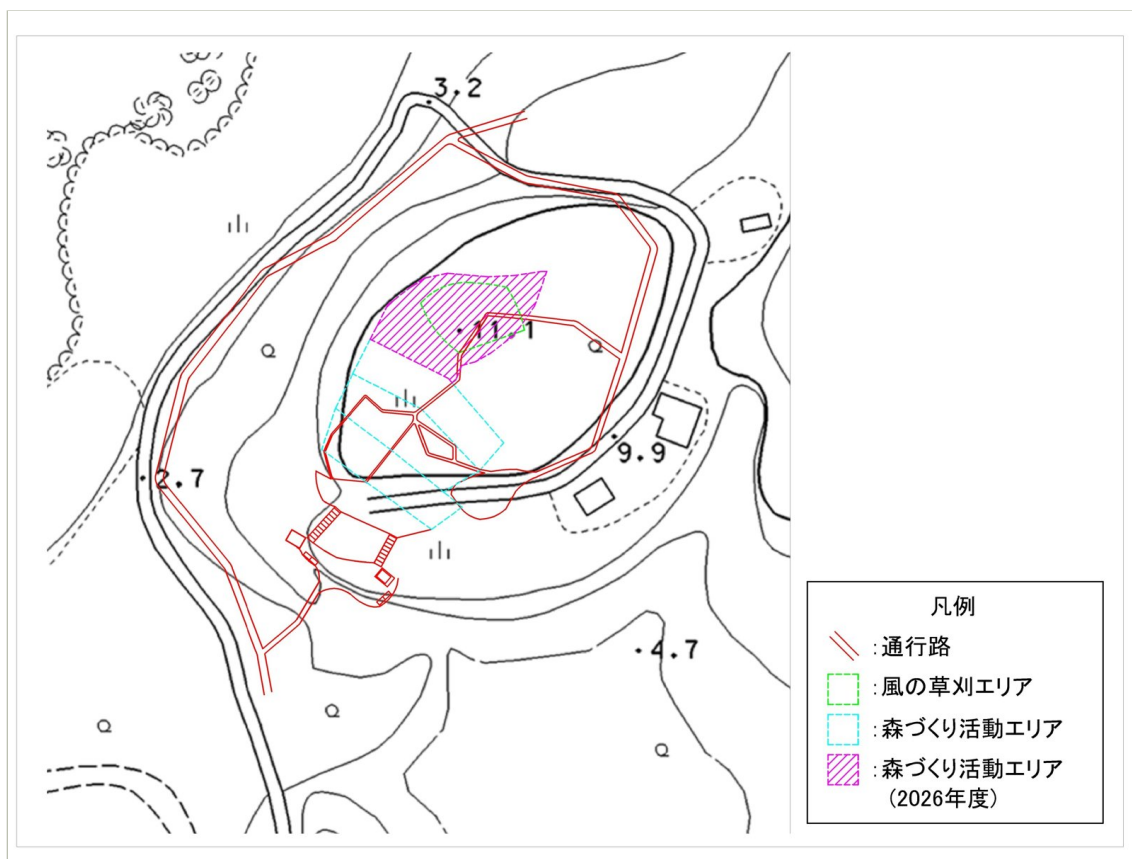
植栽したモモタマナの苗

2026年度エリアの位置

2026年度エリアは、洲崎村民の森の北部、昨年度エリアに隣接する300㎡です。父島全体での位置と、村民の森内でのエリア区画を以下に示します。



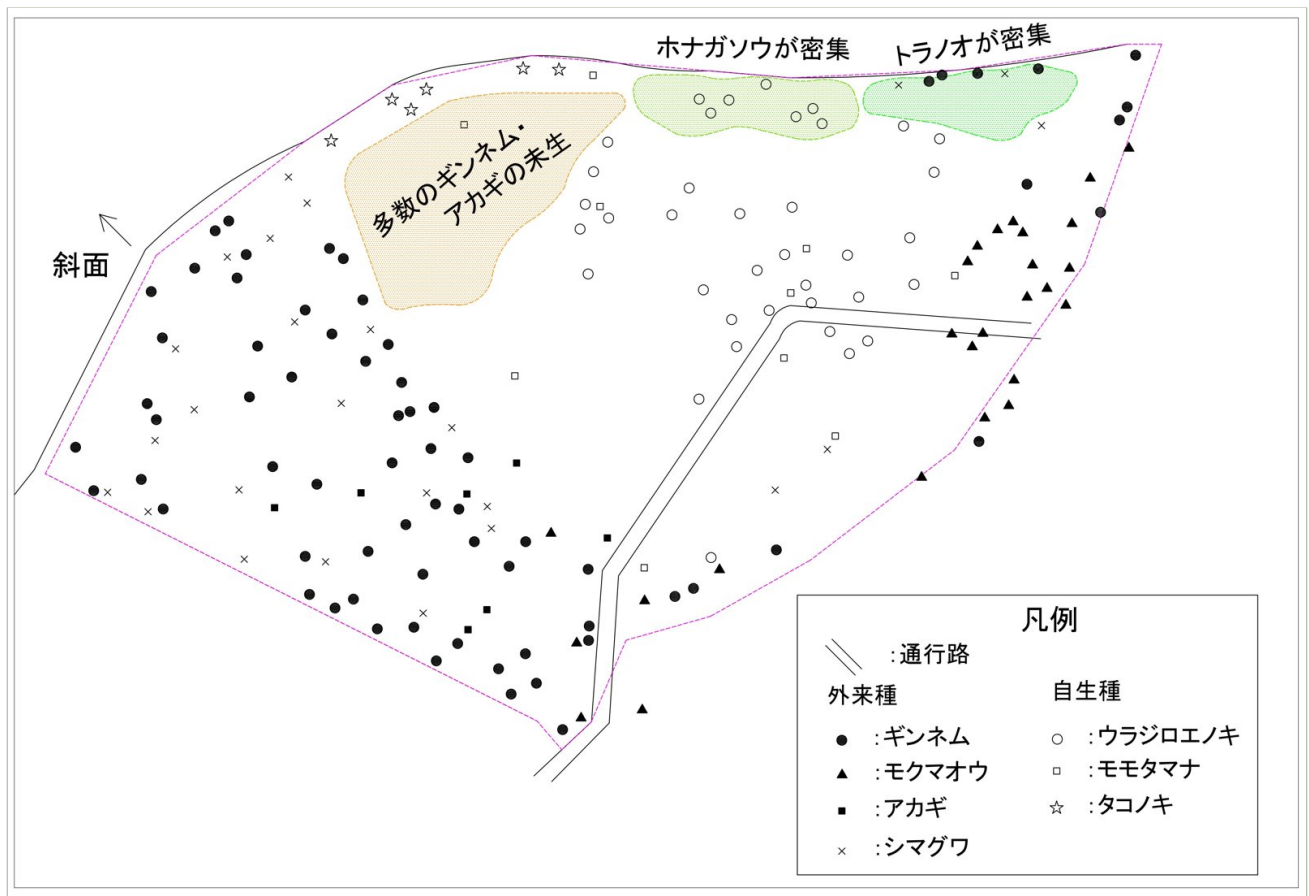
父島における洲崎村民の森の位置（赤枠）／背景図：地理院地図（電子国土Web）を使用



村民の森内における各エリアの区画。マゼンタ斜線が2026年度の森づくり活動エリア、水色破線がこれまでの森づくり活動エリア、緑破線が風の草刈エリア、赤線が通行路。

2026年度エリアの現状（森づくり前）

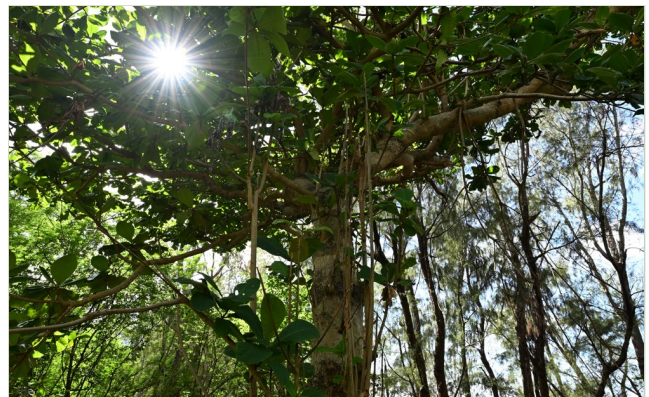
2026年度エリアの植生を調査し、樹種の分布を植生マップにまとめました。エリア内はギンネム・アカギを中心とした外来種が広く分布し、一部にホナガソウ・トラノオの密集や、多数のギンネム・アカギの実生が見られます。斜面側から通行路沿いにかけては、ウラジロエノキ・モモタマナ・タコノキなどの自生種も点在しています。



2026年度エリアの植生マップ。●ギンネム・▲モクマオウ・■アカギ・×シマグワが外来種、○ウラジロエノキ・□モモタマナ・☆タコノキが自生種。橙色は多数のギンネム・アカギの実生、緑色はホナガソウ・トラノオの密集域。



外来種が高密度に生育する林内の様子



エリア内に生育する在来種

この植生マップは「森づくり前」の記録です。バイオネスト（ヤギ対策・万里の長城）づくり、外来種の引き抜き・伐根、在来種の植栽など、今年度のTWR活動がすべて終わった時点で植生マップを更新し、「森づくり後」として並べて対比できるようにします。児童が、自分たちの活動で森がどう変わったかを目で見て確かめられる形にすることが狙いです。

児童が自生林で調べたいこと（探究の問い＝調査項目）

児童の問い	調査で確かめる観点（案）
自生林にどんな植物がいるのか？	エリア内の樹種リストづくり（固有種・在来・外来を色分け）
固有種と外来種の見た目の違いは？	葉・幹・実の写真を並べて比較図をつくる
外来種が固有種の場所をとってしまう仕組みは？	アカギ・ギンネムの広がり方、光や地面の取り合いを観察
外来種と固有種を離す方法はあるのか？	境界線の引き方、間の草地・道を"しきり"に使えるか検討

2026年度エリア作業計画

昨年度の方針（林床照度・風通しに配慮した外来種の間引き・抜根駆除および植栽、踏圧に配慮した道づくり）を踏襲する方向で、児童の方針をふまえて以下の柱を検討します。各作業の具体的な本数・場所・時期は、現地調査後に確定します。

【外来種 間引き伐根駆除】

傾斜している樹木や低木を優先的に伐根し、林冠に大きな影響を与えずに景観の向上と植栽スペースを確保する方向。児童の方針「外来種の駆除は最小限に」を反映し、固有種を増やすために必要な範囲にとどめる。**要検討：**コウモリの餌になっている外来種の実への影響をどう抑えるか。

【植栽】

伐根跡や低密度の箇所にて在来種を植栽。植栽樹種は、オガサワラオオコウモリの餌となるモモタマナやタコノキを中心に、アカガシラカラスバトなどの鳥類の餌となる樹種も取り入れ、飛来する在来動物の増加も目指す。児童の「餌が減る」葛藤への具体的な答えとなる柱。

【固有種と外来種を分ける工夫】

児童の中心的アイデア。道・斜面・草地の地形を境界として活かし、固有種の生育エリアと外来種エリアの境目をはっきりさせる。境界の引き方は現地調査で具体化する。

【バイオネストによるヤギ対策】

今年度エリアの課題のひとつが、植えた苗がヤギに食べられてしまうこと。児童が考えたヤギ対策として、駆除した木の枝を組んだバイオネストで植えた苗の周りを囲い、ヤギが苗に近づいて食べるのを防ぐ。あわせて、枝を長く連ねる「万里の長城」づくりで、エリアへのヤギの侵入そのものを防ぐ。植えた在来種を守りながら、駆除木を無駄なく活かせる方法で、児童のアイデアをそのまま活動に取り入れる。

【バイオネスト設置・補強／横断歩行路 等】

ヤギ対策を兼ねたバイオネストは、分解者（昆虫など）の生息環境にもなる。あわせて、踏圧を抑える横断歩行路などの昨年度エリアの取り組みも、今年度エリアで継続・応用するか検討する。実施可否・規模は現地条件をふまえて決定する。



踏圧を抑える横断歩行路



子どもたちによる植栽



枝を組んでつくるバイオネスト（ヤギ対策・分解者の生息環境）

数値目標 — 今後策定

【今後策定】現状把握（外来種の本数・樹種構成・外来種率）の確定後に設定します。

昨年度は「伐根本数」「植栽本数」「外来種率の低下」を数値目標に掲げ、いずれも達成しました。2026年度も同様に、植生マップと現状調査の結果をふまえて次の目標値を定めます。

- 外来種の伐根本数（樹種別：アカギ／ギンネム／シマグワ 等）
- 在来種の植栽本数（樹種別）
- 外来種率の目標（現状〇％ → 目標〇％）

年間スケジュール — 今後策定

【今後策定】作業計画・数値目標の確定後に、月別スケジュール（4月～翌3月）を作成します。

昨年度は「引き抜き」「植栽」「その他（道づくり・バイオネスト・水飲み場設置 等）」を月ごとに割り付けた年間スケジュール表を作成しました。今年度も、確定した作業内容を毎月の活動に落とし込んだ表を本欄に掲載します。作業内容は参加者の人数や植生状況を見ながら変更する場合があります。

＊本計画は児童の発言・記述をできるだけそのまま反映して取りまとめたものです。「今後策定」の各項目は、次学期の現地調査および専門スタッフによる安全・保全上の確認を経て確定します。